

追憶

北海道 川崎ヤス

昭和十七年六月寒い北国の春、若葉が萌える季節に結婚のため大泊に参りました。主人は町役場(時局課)に勤務し、また在郷軍人会の役職も兼ねておりました。

大東亜戦争も当時は勝利の戦で明るいムードで推移しておりました。当時の主人の給料は百円ほどで、私は手職として和裁の免許もありましたので近所の娘さんに教え、生活も安定しておりました。

家族は私達夫婦と主人の母、妹一人、弟二人の六人家族でした。十八年春長女、二十年春長男出生、家族も八人となり家中賑やかで平和な幸せな三年有余でした。

昭和も十九年にはいつてから、戦果も思わしくなくなり、学徒動員、すべての物品については統制強化、食糧配給の遅配、日用雑貨品の極度の品うすと日一日戦争の余波が当地にも暗い影を落とすようになりました。

二十年の三月頃より主人が再三、再四北海道に疎開した方が家族の安全のためと母や私を説得したのも主人の仕事の関係で、先を読んでいたからだと思えます。

この頃は学校も休校となり、妹は陸軍軍属、弟は海軍軍属となり、末弟は小学校六年生で援農に勉強は二の次でした。家では食糧の自給自足のため姑とともに畠に出て馬糞、カボチャ、野菜と農作業に精を出した記憶もよみがえります。

また、大泊は魚が豊富で鯿、マス、タラ等の干物も非常食として防空壕の中に備蓄しておりました。

八月八日ソ連と交戦状態となり日一日と大泊も緊迫して参りました。八月二十日、北海道に疎開すべく決定致し、十五日朝主人は末弟の転校届のため小学校に行き帰宅して間もなく、ラジオの臨時ニュースと終戦詔勅で終戦となったのです。

主人の「無条件降伏! 戦争は終わった! 日本は負けた!」の説明で隣組や私達家族も涙を流したのもつかの間、主人は敗戦となればソ連軍がいつ南下進駐してくるかわからないので、女、子供は即刻引揚げた方が良いと

いうことで、その口のうちに我が家を始め、隣組全戸に強制的に諸手続きをし引揚げの準備をし、私共赤飯を炊き家族全員で早目の夕膳で主人との暫くの別れを惜しみ、食事もそこで、住み馴れた思い出の家をあとの暗闇の中、徒歩で大泊港に向かったのてず。

家族全員、身につけられるだけ着て本当に着のみ着のまままで長男を背に長女は主人が身の廻りの品と共にリヤカーに乗せて引き、途中幾度も「残務整理が終り次第一日も早く帰国するから、皆で力を合わせ頑張るように」と励まされ、これが主人との永遠の別れになるとは誰にも想像出来ないことでした。

港に着いて乗船段階になると手荷物は一一人一個と制限され、主人がリヤカーに積んで来た荷物も、大半持ち込み出来ず、私達が乗船後、リヤカーと持込出来ない荷物を主人が暗い港の海に投げたのが、一緒に帰国出来なかった主人の気持が伝わってくるようで、誠につらい思い出となっています。

船は確かに稚泊連絡船の宗谷丸で、出航したのは深夜十二時と思います。宗谷海峡の海は穏やかで、満点の星

空が広がり、船室の窓から見ているとなかなか仮眠も出来ずにいるうち、十六日の早朝となり、北海道の山々が目にはいつて参りました。

大泊出航後連絡船の廻りを護衛艦、空には飛行機と警戒しておったようで、私達の周囲には漁船も群れをなして稚内港に無事入港したのでございます。

当初予定しておりました旭川、留萌共に空襲を受けたことを汽車に乗ってから聞かされ最終的に私の故郷でもある叔母のところに着くこととなりました。

列車の中での思い出としては、食べる物もなく十七日朝深川の駅で乗り替え時間の間、駅前の旅館に事情を話してオニギリを買い求めている間に満二歳の長女が見えなくなり大騒ぎをしたことも思い出されます。

十七日夕刻増毛に到着、家族七人お世話になることは大変でした。長期間お世話になることも出来ませんので、親戚にお願ひ葉葺き屋根の物置を一軒借り、当初人の住める状態ではありませんでしたが近所や親戚の好意で補強して貰い、八月末頃引越し出来る段取りまでなりました。

丁度この頃、家のことで右往左往していた八月二十日早朝、樺太より引揚船が増毛と鬼鹿沖で、国籍不明の潜水艦の魚雷でうたれ多くの同胞が犠牲となり、もし主人の言葉通りにしておらなかったら自分達もと、考えたら本当に恐ろしく思いました。

それから二三日後悪夢を見ている思いでした。海岸には水死体が漂着し満足に弔いもされず増毛の墓地に土埋されたことも戦争での決して忘れることの出来ない身近な体験でした。

仮住居藁葺の物置約十坪強に七人が生活することは大変なことで、日常最低必要とする食器、布団、食糧等も親戚の好意で貧しくとも何とか生活が出来るようになりました。

然し女子供の世帯で収入もなく、引揚げのときに持参したお金も残り少なく、二十年の秋からは親戚の造材所の飯場に母、妹、弟が出稼ぎに行き、残ったのは私共親子三人と、末弟との四人家族で、夜は電気もなくランブの生活で、手内職の和裁をし生活の糧としたただただ夢中で過ごしました。

引揚後の三年間は、言葉で表現出来ない苦勞の連続で、一日も早く主人の帰国を心待ちにしておりました。

戦後引揚者の知人等に主人の消息を聞くも、明確な情報も得られず、主人と仕事の関係で戦犯に問われ拘束された、またあるときは、大泊より船で脱走して失敗したとか、いずれも疑心暗鬼のことばかりで、生死の判断がつかぬ間に年月を経て、二十四年長女小学校入学を機に旭川に移転、家族全員間借りながら七人の生活が始まりました。

二十七年春、旭川裁判所並びに引揚援護局より主人の死亡宣告の悲報を受けたのでございます。二度とこのような多くの戦争犠牲者を出さないよう願っている次第でございます。

終戦時の苦難を乗り越えて

北海道 佐藤 晴夫

樺太で生まれ育った私は、昭和十四年五月、現役兵と